

一般科目「社会学」の授業の改善と学生による授業評価について

野 邊 政 雄

目 次

1. 本稿の目的
2. 授業の改善
3. 一般科目「社会学」の授業の実際
4. 学生の授業評価
5. 検討
6. 結論

私は平成10年度の前期に一般科目（一般教養科目）の「社会学」の授業を担当した。本稿では、受講学生の授業評価などにより、その授業を検討し、次の3点を明らかにした。(1)私は、映画やドキュメンタリーを上映したり「講義ノート」を配布することで、社会学の授業を理解しやすくするように努めた。また、書評レポートを学生に書かせ論文作成の基礎を学ばせようとした。学生は、これらの授業改善をかなり評価していた。それから、授業のやり方や講義内容でとりたてて問題点はなかった。(2)多くの学生は、映画を上映したとき、授業時間が延長になることに苦情を持っていた。私は学生があげた苦情を解決しようと授業中に努力したが、大部分の苦情は私の努力ではどうにもできないものであった。(3)大学の当局や事務担当者には、次の2つが望まれる。第1に、2時限連続の授業を設けることができるようにするなど、授業の性格に応じてより柔軟に、授業を開講できるようすべきだ。もしこれが可能であれば、私の授業に対する学生の苦情はほとんどなかった。第2に、シラバスを全学部の学生に配布するか、インターネットで誰でも簡単に閲覧できるようにすべきだ。

次に、授業の改善として、私は次の3点を提案した。(1)研究の方法を一般教育課程で学生に組織的に教えること。(2)大学の授業を他の教官に公開することによって、授業の改善に努めること。(3)教官の授業負担を軽減し、授業の充実をはかること。

Keywords：社会学，授業改善，授業評価

1 本稿の目的

私が大学教官となった今、昔を思い起こしてみると、私が教えを受けた大学教官は授業をあまり熱心におこなっていなかったように思われる。すべての授業が面白くなかったとか、理解不能というわけではなかったが、学生に分かせようとして講義をしているとはとても思われない教官が多かった。例えば、ある教官は学部の授業で専門用語を使い、講義ノートを棒読みし、受講学生が理解できているのか

どうかまったく気にかけることなく、講義をしていた。その教官は、学部の演習の授業で、自分がそのとき執筆している論文や本の引用文献を輪読させていた。また、別の教官は「自分の研究に役立たない演習をやりたくない」と公言していた。これらの教官は自分の研究業績を上げるために、授業を利用していたのである。官庁の審議委員などの要職に多数就いていたある教官は、授業開始時間にたいい教室に来なかった。授業開始後30分たって教官が来な

かったら休講になるという慣例があったので、3分の1の授業は休講となっていた。学生に事前に休講の連絡をせず、自分の都合で休講にしていたのである。休講のための補講をおこなわなかったのは、言うまでもない。当時、私は授業が理解できないのは自分の勉強が足りないとか、大学では授業が時間通り始まらないのが普通なのだと考えていた。また、大学の先生は偉いからということで、大学教官の権威を受け入れてしまっ、大学教官のそうした行為を当たり前と考えていた。大学教官は授業をまじめにやってくれなくても、「単位をつけてくれればまあいいか」とも考えていた。

私はオーストラリアの大学に4年半留学し、そこで授業を受講して、そうした考えは一変してしまった。大学教官は授業の準備にかなりの労力をさいていた。毎時間の授業の目的、内容、参考文献を明示したシラバスを作成し、学期の初めに配布していた。さらに、教官は話術を工夫したり、OHPなどの視聴覚器材を効果的に使うなど、授業を充実させるのに努力をしていた。また、テスト、レポート、チュートリアルでの発言を厳格に採点し、成績評価を出していた。学生は権利意識が強く、いい加減な授業をする教官には抗議をしていた。この体験は、私にとって大きなカルチャーショックであった。

私はこうした体験をして、日本に戻って大学教官になった。今から考えてみると、私が大学生であった当時の大学教官の行為は、非常識以外の何ものでもないと思う。大学教官は学生を教育するために給与をもらっているのである。にもかかわらず、学生に理解できないような授業をすとか、無断で休講にしようというのは、単に社会人として非常識なのだ。こうした思いがあったから、大学教官になって以来、私はできるだけ労力をさいて、授業の改善に努めてきた。ただし、それがどの程度うまくいったかは分からない。

従来、大学の授業を受講学生以外に見せたり、その実態を外部に明らかにすることはあまりおこなわれてこなかった。だが、これはおかしい。岡山大学の附属小学校や中学校では、先生方は研究授業を公開し、教育方法を熱心に研究している。同じように、大学教官は自らの授業を積極的に公開し、批判を仰ぎ、授業を改善してゆくべきだ。これは大学教官の使命である、私は思う。

さて、平成10年度の前期に一般科目（一般教養科目）として「社会学」を担当した。本稿では、その授業の顛末を紹介したい。具体的には、次の4点を本稿ではおこなう。第1に、私が採用した授業改善の方法を説明する。第2に、一般科目の「社会学」

の授業を実際にどのようにおこなったかを紹介する。第3に、学生へのアンケートにもとづき、受講学生がその授業をどのように評価したかを明らかにする。第4に、学生による評価にもとづいて私の授業を検討した後に、授業を今後どのように改善していったらよいかを考察したい。私が大学教官になってから10年たち、自分自身を振り返るべき時期にさしかかった。自分を反省する意味から、本稿を執筆した。本稿を読まれた教官、学生、一般の方に、授業改善の方法を助言していただけたらと思う。

2 授業の改善

私は大学で授業をこれまで10年間おこない、試行錯誤をしつつ、授業の改善に努めてきた。こうして確立した授業の改善点は、次の5つである。

第1の改善点は、講義の要点を列挙し、統計資料をそれに付けた「講義ノート」を作成し、受講学生に配布していることである。講義の筋道を明示しないと、受講学生は講義をあまり理解できないことが分かったので、「講義ノート」を作成し始めた。これによって、私はあまり板書しなくてもよいし、学生は板書をノートに書き写さなくてもよいので、講義時間の節約にもなる。学生は、私が講義ノートに書かなかった補足的説明だけをノートや「講義ノート」に書くだけですむ。ティーチング・アシスタントの大学院生に統計資料の収集や講義ノートの印刷をしてもらっている。

第2の改善点は、講義に関連の深い、テレビのドキュメンタリーや映画を上映していることである。学生は実社会での経験に乏しいから、社会学の講義内容を十分に理解できないことが多い。テレビのドキュメンタリーや映画を上映することで、視覚に訴えて、講義を学生に理解させようとしている。NHKが制作したドキュメンタリーを録画しておいて、授業で利用することが多い。

第3の改善点は、テストをおこなうだけでなく、書評レポートを課していることである。大学での研究のためには、論文を書けなくてはいけない。だが、日本の高校までの教育では、論文の書き方を指導してはいない。また、大学でも、多くの教官は授業の中でそれを明確に教えてはいない。そこで、論文の構成の仕方や論文の書き方の基本（段落の切り方や禁則処理など）を教えた上で、書評レポートを書かせ、その添削をおこなっている。これによって、論文の執筆方法を受講学生に習得させようとしているのである。さて、学生に一方的に講義し、どれだけ講義を暗記したかを最後にテストでチェックして、成績評価をおこなうことが、大学の授業では

多いと聞いている。しかし、これではどれだけ講義内容を学生に考えさせることができるのか疑問である。講義に関連の深い本の書評レポートを学生に課することで、講義内容を学生に考えさせることもねらっている。

第4の改善点は、休講はできるだけおこなわず、授業開始時間に遅れないようにしていることである。無断休講をおこなわないのは無論のこと、学会出席などでやむをえず授業を休講にせざるを得ないときは、必ず補講をおこなう。また、授業開始時間に遅れないように心がけている。これらのことは大学教官として当たり前のマナーで、言わずもがなのことであるが。

第5の改善点は、授業をおこなうに当たって、学生の意見に耳を傾けようとしていることである。受講学生にアンケート調査を実施し、授業を評価してもらうだけでなく、授業改善の方法を提案してもらうようにしている。このことは、学生におもねて、単位を取りやすい授業をおこなっているということではない。

これら5つの改善方法によって、私は岡山大学教育学部で専門科目の授業をこれまでおこなってきた。私は、平成10年度の前期に全学部の学生を対象とする一般科目「社会学」の授業を初めて担当した。この授業も、それらの改善方法にもとづいておこなった。

3 一般科目「社会学」の授業の実際

(1) 授業内容について

映画はそれぞれの時代における社会の断面を切り取ったものである。だから、映画を上映しながら、社会学の授業をおこなうことは、学生が授業の内容を理解するのに大いに役立つと思われる。この考えから、「映画による社会学」の授業を実施することに思い至った⁴⁾。具体的には、映画の上映とそれにもとづく講義を1つのセットにし、これを繰り返して、半年にわたる一般科目「社会学」の授業を実施することにした。付録1は、この授業のために作成したシラバスである。映画は必ずしも90分で終わるとは限らないので、そのときは、授業時間を延長した。授業時間が延長できるように、一般科目の「社会学」の授業は、1日のなかで最後の授業となる5限に開講した。

授業で上映した映画とそれにもとづいて話した講義内容は、以下の通りである。

- ・第1回授業 チャップリンの「モダンタイムス」(1938年制作)の上映

- ・第2回授業 分業の進展の功罪についての講義
工場内分業と社会的分業の進展によって大量生産ができるようになり、大衆消費社会が到来した。こうして、大量生産・大量消費の生活様式が定着し、人々の生活が豊かになった。同時に、労働者は組織の歯車となり、労働から生きがいを得られず、疎外感を持つようになった。また、大量生産・大量消費の生活様式は大量のゴミを生み出し、環境問題を発生させている。こうした点を講義した。

- ・第3回授業 黒沢明の「生きる」(1952年制作)の上映

- ・第4回授業 官僚制と官僚制の逆機能についての講義
マックス・ウェーバーの官僚制論を講義した。官僚制は迅速で効率的に事務処理ができるが、「形式主義」、「儀礼主義」、「繁文縟礼^{はんぶんじよくれい}」といった望ましくない結果も生み出す。

- ・第5回授業 小津安二郎の「生まれてはみたけれど」(1932年制作)の上映

- ・第6回と第7回授業 子供の社会化についての講義

子供は家族の人々や遊び仲間などとの交流を通してそれぞれの社会の文化(社会で一般的に受け入れられている生活様式や行動様式)を習得し、段々と大人になってゆく。社会学や人類学では、この過程は社会化と呼ばれている。他の動物でも社会化はあるが、社会化は人間にとってはとても大切であること、家族は子供の基本的社会化過程において重要であることなどを講義した。TBS系列で放映された「動物奇想天外」(平成4年9月に放映)の一部を上映し、動物の本能について説明した。また、NHKの教育テレビで放映された「世界くらしの旅 国際化のなかの日本」(平成10年4月に放映)を上映し、人間の文化の多様性や社会化について説明した。

- ・第8回授業 ケビン・コスナーの「ダンス・ウィズ・ウルブズ」(1991年制作)の上映

- ・第9回授業 フィールド・ワークについての講義
社会学者や人類学者は自分が生まれ育ったのとは別の社会に滞在し、現地の人々と生活を共にしながら、フィールド・ワークをおこなう。社会学者や人類学者がフィールド・ワークをおこなうということは、調査する社会で生まれた子供が成長する過程で学ぶことを習得するということである。また、社会学者や人類学者はフィールド・ワークによって研究した社会の生活様式(異文化)を1つの尺度として、自らが生まれ育った社会の文化的特徴にも気づ

くようになる。私がオーストラリアでおこなったフィールド・ワークの体験を話しながら、そうした点を講義した。

- ・第10回授業 浦山桐郎の「キューボラのある街」(1962年制作)の上映
- ・第11回授業 高度経済成長による日本社会の変化についての講義

高度経済成長期に、日本社会は大きく変化したということを講義した。第1次産業従事者は減少し、第2次や第3次産業従事者が増加した。また、自営業者は減り、代わりに、雇用者が増えた。高校、短大、大学への進学率は急激に高くなった。また、「3種の神器」や「3C」といった耐久消費財が国民の間に普及していった。こうして、高度経済成長期に階層間格差が縮小し、日本はより平等な社会になった。「キューボラのある街」で描かれた貧困は現在ではほとんど見られなくなってしまったが、わずかに1世代前のことなのだ。NHKの教育テレビで放映された「歴史で見る日本 経済大国への道」(平成5年3月に放映)と「シリーズ 高度経済成長とは何だったのか」(平成6年10月に放映)の一部を上映し、学生の理解を助けた。

- ・第12回授業 環境問題の講義

高度経済成長期に、日本は経済成長に邁進した。これによって、日本は経済的に豊かな国になったが、同時に、大都市への人口集中、山間農村の過疎化、社会資本の不足といった、多くの社会問題も発生した。公害もそうした社会問題の1つである。高度経済成長期に起こった「水俣病」は、経営者が利潤追求のあまり、公害防止の施設を設けなかったために、発生した。このように、公害を発生させた加害者がかなり明確であった。ところが、最近の公害は性格が変化している。「豊島のゴミ問題」や「新幹線騒音公害」のように、誰でも加害者になったり、被害者となったりするようになった。水俣病をまったく知らない学生が多かったので、NHKの総合テレビで放映された「その時日本は 第4回 チッソ水俣工場技術者たちの告白」(平成7年7月に放映)を上映し、水俣病とはどういう公害事件であったかを学生に理解させた。

- ・第13回授業 土本典昭の「水俣——患者さんとその世界——」(1971年制作)の上映
- ・第14回授業 テスト

質問などがあるときは、電話ないしEメールでアポイントを取ってくれば、研究室で話をすることを書いたプリントを第1回授業で配布した。映画を上映するときは、その映画のシノプシス(監

督、出演者、制作年、あらすじなどが書かれたもの)のコピーを学生に配布した。映画終了後に、学生に映画の感想を書かせ、提出させた。そして、次の授業の冒頭において感想を紹介することで、映画にもとづく講義に関心を持たせるように努めた。さて、私は講義の要点を列挙し、統計資料をそれに付けた「講義ノート」を作成し、受講学生に配布していることは、前述の通りである。一般科目「社会学」の授業でも、「講義ノート」を作成し、学生に配布した。付録2は、分業の進展の功罪についての講義(第2回授業に当たる)で配布したものである。学生の自習を促すために、「講義ノート」には参考文献を付けるようにした。

(2) 課題について

授業改善の一貫として、書評レポートを課していることは、前述の通りである。一般科目の「社会学」では、次のように書評レポートを課した。

授業時間中に書評の形式や原稿用紙の使い方を説明した。まず簡単に本の紹介をし、次に重要と考えられる論点を3点ほど取り上げて説明し、重要な論点について論評を加えるという書評の形式を指示した。また、1つの主張や論点ごとに段落を設定するとか、禁則処理といった、文章の書き方の基本を指導した。参考のために、野村一夫著『社会学の作法・初級編——社会学的リテラシー構築のためのレッスン』の第5章の一部をコピーし、学生に配布した。また、以前、私の授業を受講してすぐれた書評を書いた学生がいたが、その学生の書評をコピーし、書評の例として配布した。

この上で、2つの本の書評レポートを書くことを課題として課した。講義の理解に役立つ図書を課題図書として選定した。第1回目の課題は、鎌田慧著『自動車絶望工場』(講談社文庫)の書評を書くことである。この本は、工場内分業に関する講義(第2回授業)と関連が深いので選定した。第2回目の課題は、上田紀行著『スリランカの悪魔祓い』(徳間書店)、青木保著『タイの僧院にて』(中公文庫)、中根千枝著『未開の顔・文明の顔』(中央公論社、ただし、現在絶版)、福岡安則著『在日韓国・朝鮮人』(中公新書)の中から1冊を選び、書評を書くことである。これらの本は、フィールド・ワークに関する講義(第9回授業)と関連が深いので選定した。それぞれの書評は2,000字以上であることと指示した。課題図書名、提出期限、注意事項を書いたプリントを学生に配布し、また掲示板に掲示することで、書評レポートの課題があることを学生に周知徹底させた。提出のあった書評は添削し、講評

を書き、20点満点で成績評価をして、受講学生に返却した。第1回目の書評レポートのうちですぐれたもの2点をコピーして配布し、学生にいつその研鑽を促した。これらの書評レポートを書いてもらった後に、論文作成に役立つ文献のリスト（付録3を参照）を学生に配布した。

(3) 成績評価について

私の一般科目「社会学」を受講登録した学生は、157名であった。第1回目の書評レポートを提出した学生は41名であった。そのレポートを20点満点で採点したが、その採点結果は次の通りである。A（20点）は31名、B（13点）は4名、C（7点）は6名であった。第2回目の書評レポートを提出した学生は33名であった。これも第1回目のレポートと同様に20点満点で採点した。採点結果は、次の通りである。A（20点）は31名、B（13点）は2名、C（7点）は0名であった。BやCと評価した書評レポートには、指示した書評の形式通りに書かれていないなどというように、Aと評価しなかった理由を明示した。受講学生は書評を2回書いたのて、書評レポートの得点は合計で40点となった。論述式のテストを最後の授業時間（第14回授業）に実施した。テストは60点満点で採点したが、その平均点は50.31であった。その得点の分布は、表1の通りである。

大学の規定の通りに、授業の出欠を取り、3分の2以上の授業に出席した学生にのみ成績評価をおこなうようにした。だが、2回書評レポートを提出しテストを受けた学生で、出席が不足した学生はいなかった。書評レポートとテストの得点を合計し、100

表1 テストの得点分布

得点範囲	人数
50-60	22
40-49	6
30-39	2
20-29	1
10-19	1
合計	32

表2 成績評価の分布

得点範囲	人数
90-100	18
80-89	8
70-79	4
60-69	1
59以下	1
合計	32

点満点で成績評価を出した。その平均得点は87.97であり、得点の分布は表2の通りである。つまり、「優」に当たる80点以上の学生は26人、「良」に当たる70点以上79点以下の学生は4人、「可」に当たる60点以上69点以下の学生は1人、「不可」に当たる59点以下の学生は1人であった。

(4) その他

前述したように、私は授業開始時間に遅れないように心がけている。ただし、次に述べる理由から、一般科目の「社会学」の授業には多少遅刻せざるをえなかった。岡山大学では、授業と次の授業との間に10分の教室移動時間が設けられている。私は一般科目の「社会学」の直前に別の授業を担当しており、一般科目の「社会学」の教室は私の研究室からかなり離れていたのて、自転車を使っても一般科目の「社会学」の教室に10分で行くことはできなかった。そこで、その講義は10分ほど遅れて始めざるを得なかった。

4 学生の授業評価

平成10年6月23日におこなった第12回授業の終わりにアンケート調査を実施し、学生に授業を評価してもらった。ここでは、その結果を示す。回答者は26名であった。

〔質問1〕野辺が担当する「社会学」を受講して、あなたはどのように感じましたか。下の項目ごとに○をつけて下さい。

・この質問への回答は、図1の通りである。

〔質問2〕野辺の授業を全体として評価したとき、100点満点で何点ですか。

・平均点は、72.9点であった。

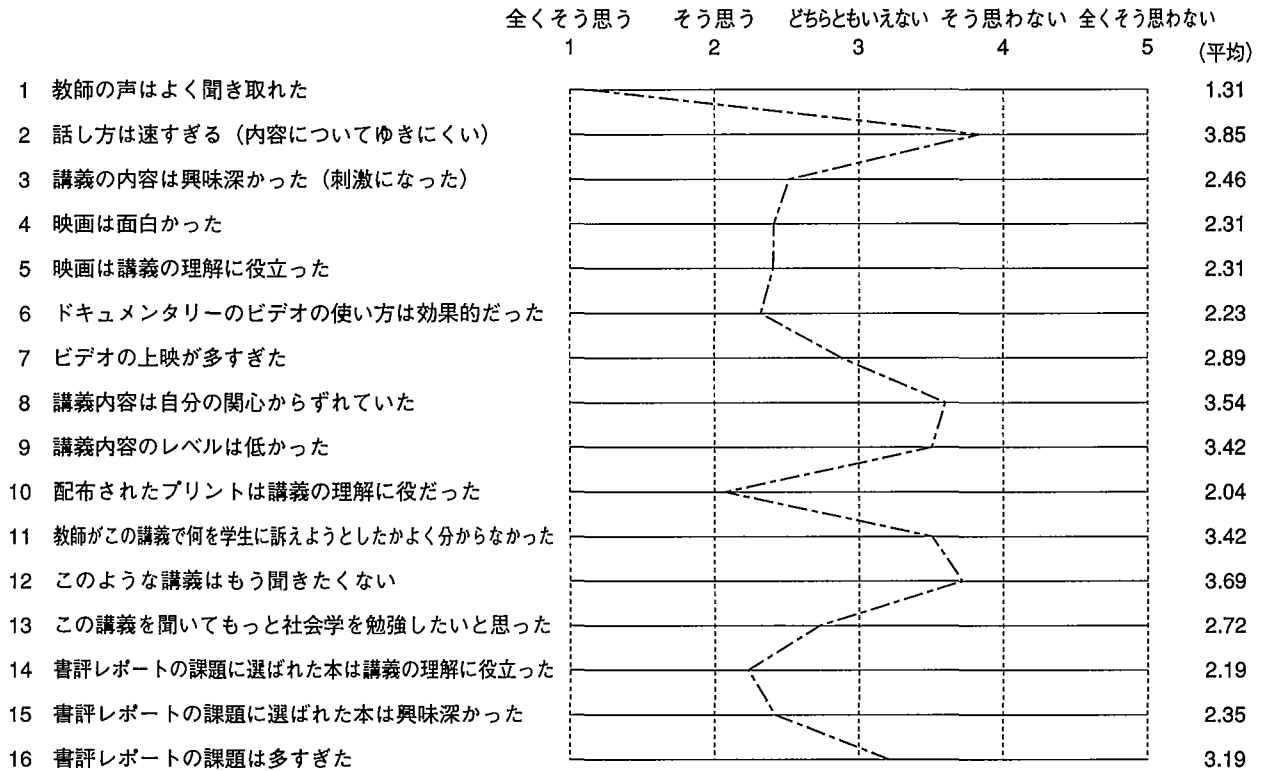
質問3から質問5の回答は、自由記述式である。以下では、学生の回答を列挙するが、取捨選択を一切していない。

〔質問3〕（質問2で100点をつけなかった人へ）どういう点が悪かったのかを具体的に書いて下さい。

（それぞれの学生が私の授業を100点満点で採点した得点を後に記しておいた。100点をつけた学生は、1人もいなかった。）

・初めの授業の際に、社会学を勉強する上でどのような本を読んだらよいかについて、時間をさいてほしかったです。（90点）

・終わりの時間があいまい。（60点）



(注) 学生の各項目の評価の平均

図 1 学生の授業評価

- 授業の延長が多すぎた。(70点)
- 授業時間が長い。(90点)
- 時間がのびること。(90点)
- 講義の延長は可能な限り避けるべき。90分で行うのがギリヨウ。(60点)
- 映画を全部見てしまって時間を過ぎるところ。(70点)
- テストは学校のきそくに従ってやるのに、いつもはんばじゃないほど授業が長びいていて、そのために予定 (アルバイトや部活) にいけなかったり、先にかえると欠席にされたりして、不公平だ。(0点)
- 時間の延長が多すぎた。分業や公害についても、もう少しつっこんだところまで話してほしい。(70点)
- 厳しすぎる。映画が長すぎる。(80点)
- やっぱりレポートは大変だった。(70点)
- ビデオが見にくい。(80点)
- 映画等を見るとき、スクリーンが明るすぎて少し見にくかった。(95点)
- レポートの提出場所 (教官室番号) が394と349と間違えたりとミスが目立った。(60点)
- 自分の興味がひきつけられなかった題材が2回くらいあった。(80点)
- 教官自身の意見の押しつけと見られるところがあったから。(68点)
- こちらの受け取めが悪いのかもしれないが、「豊かになるのは悪いことだ」という感じだった。しかし、先生の主張はよくわかった。(85点)
- 例えば、「分業」についての講義において、「分業」にはこういう利点があってこういう悪い点があるということは先生が説明されますが、それをふまえてどうなのか。どのようにしていくべきのかなど、先生の個人的な意見でもよいので説明されないと、なにも得るものがない。(50点)
- 授業のやり方というワケではなく、5限というのが意外につらかった。(90点)
- 特に悪い点はないが、満点にはいかない。(70点)
- ビデオ→解説よりも、解説→ビデオ→補足の方がわかりやすいと思いました。(80点)
- 書評レポートの課題に選ばれた本が手に入りにくかった。授業がのびる。(70点)
- 先生の講義は興味深かったけど、「モダン・タイ

ムス」や「生きる」などは長い時間をかけて見たわりにはあまり参考にならなかったし、面白くもなかった。(75点)

- 都合上、仕方がなかったのだと思うけど、補講は日曜日以外にしてほしかったです。(90点)

〔質問4〕この授業をどのようにしたらよりよくできるかを、具体的に書いて下さい。

- 時間どおりに終わる。
- 時間通りにすれば良いと思う。90分以上集中するのは大変だから。
- 映画を2回に分けて見る。
- このような講義形式もよいが、人数をあらかじめしぼっておき、前もってテーマを知らせておいてから討論形式のようなことをしても面白いと思います。
- 分かりません。
- 映画はもっと短くして。授業の時間をもう少し長くする。
- もう少し狭い部屋で。
- いろいろな角度からの考えを聞かせてほしい（一つの考え方だけでなく）。
- 生徒と分かり合う事。
- 書評レポートの時の本の選択をもっと幅広く。手に入れやすい、一般的な本の方がいいと思う。
- とりあげるテーマが、毎回古い。もっと、時々問題にするどく切り込むような内容をとりあげるとよいと思う。
- 授業はよく解った。
- 思いうかばない。
- 大学の規定だといえそうだが、成績評価が厳しいかもしれない（一般的に見て）。
- 上記の方法（解説→ビデオ→補足といった授業の進め方）の方がビデオを理解しやすい。
- 映画とかをもっとたくさん見れたらいいと思う。
- もう少し深い所まで教授の話を知りたい。なるべく時間内で終わってほしい。
- ダラダラ長い映画ではなくてもっと主題がはっきりしていて分かりやすい映画、起伏が多くてより興味が持てる映画を選んでほしい。

〔質問5〕この授業に対する感想、批判、注文など、何でも構いませんから自由に書いて下さい。

- この授業を通じて、自分の住んでいる社会やそこでの様々な問題について今までとは異なる視点で考えるきっかけが得られ、よかったと思います。
- “ダンス・ウィズ・ウルブズ”の映画がとても心に残った。

- 内容自体はまあまあ面白かった。
- もう少し踏み込めれば。
- あまり興味を持たなかったこと、知らなかったことについて改めて興味を持つようになった。
- 授業は黒板の字も大きく、しゃべりもうまく聞きやすく理解しやすかった。
- 先生の熱意がよく伝わり良かった。これで単位がとれば最高。
- 色々お世話になりました。ありがとうございました。
- 映画は、本当に面白かった。「生きる」は、泣いた。この授業は「『生きる』を見た授業」として一生心に残ると思う。
- 先生の話しぶりは、聞いていて、非常にきもちよく耳に入った。しかし、もっと個人的見かきを聞かせてほしかったと思う。
- 文学部の一般教養のシラバスに講義の概要を載せてほしかった。授業に関しては、時間以外には批判すべきところがない。
- 最後に授業全体のまとめとしてのメッセージがあるとウレシイ。
- 見た映画はどれも考えさせられるものがあり、また、心に残った。どれも良かったと思う。
- 今の厳しいままでいいと思います。他の授業よりも真面目にやったという意識が自分の中にあり、満足しています。
- 講義のすすめかたは、映画などを見たりするので退屈なくてよかったし、先生の声も聞き取りやすかった。ただ、授業時間があまりにものびるのは正直なところしんどかった。
- 全教科の科目の中で一番社会学がおもしろかったし、興味を持てる科目だった。条件が少し厳しくて、はじめ300人ぐらいからだいたいぶへったけど、書評の書き方等、今後役に立つものが多かったと思う。
- 「ダンス・ウィズ・ウルブズ」と「キューボラのある街」は特に印象に残ったし、授業内容をより理解できたような気がする。プリントは講義の助けになって、すごく良かった。
- 今まで書いたことのなかった書評を書いてみて、レポートの書き方の練習になってよかったと思う。映画も、私が今まであまり見たことのない、古めの映画が、かえて私にとっては珍しかったので興味深く見ることができたと思う。
- 講義の内容は面白かったです。私はこういうのが好きです。書評レポートの本の内容も興味深いものでした。でも書評しにくい本だなあ、と思いました。レポートを最初に言われた通りに、きちんと

と評価してくれたのが良かったです。私のように形式に慣れていないものはまず慣れることから始めたいのです。形式+内容を求める先生がいて困りました。

5 検 討

第1に、私は授業の改善を目指したが、それがどの程度うまくいったかを検討する。前述のように、映画やドキュメンタリーを上映したり、「講義ノート」を配布することによって、授業を理解しやすくし、また、書評レポートを学生に書かせることによって論文作成の基礎を学ばせた。こうした授業の改善がどの程度成功したかを見たい。

質問1で私の授業を16の項目に分けて、学生に5段階評価をしてもらったが、これによってそうした授業改善の効果を検討する(図1を参照)。まず、映画やドキュメンタリーを上映したことである。

「映画は面白かった」かどうかという項目と「映画は講義の理解に役立った」かどうかという項目の評価の平均は2.31であり、「そう思う」という評価に近い。また、「ドキュメンタリーのビデオの使い方は効果的だった」かどうかという項目の評価の平均は2.23であり、「そう思う」という評価にやはり近い。次に、「講義ノート」を配布することについては、「配布されたプリントは講義の理解に役立った」かどうかを尋ねた。この項目の評価の平均は2.04であるので、学生はほぼ「そう思う」と評価していることになる。それから、書評レポートを学生に課したことを見ておく。「書評レポートの課題に選ばれた本は講義の理解に役立った」かどうかという項目の評価の平均は2.19であり、「そう思う」という評価にかなり近い。また、「書評レポートの課題に選ばれた本は興味深かった」かどうかという項目の評価の平均は2.35であり、「そう思う」という評価に近い。これらのことから、学生は授業の改善を好意的に評価しており、授業改善がかなり成功していたと判定できる。

質問1で、授業のやり方も学生に評価してもらった。「教師の声はよく聞き取れた」かどうかという項目の評価の平均は1.31であり、「全くそう思う」という評価に近い。「話し方は速すぎる(内容についてゆきにくい)」かどうかという項目の評価の平均は3.85であり、「そう思わない」という評価にかなり近い。さらに、質問1で、講義内容についても評価してもらった。「講義の内容は興味深かった(刺激になった)」かどうかという項目の評価の平均は2.46であり、「そう思う」と「どちらともいえない」のほぼ中間の評価であった。また、「講義内

容のレベルは低かった」かどうかという項目の評価の平均は3.42であり、「どちらともいえない」と「そう思わない」のほぼ中間の評価であった。これらのことから、授業のやり方や講義内容でとりたてて問題点はなかったといえるだろう。

評価が「どちらかともいえない」項目も若干あった。「ビデオを上映することが多すぎた」かどうかという項目の評価は学生の間で分かれており、その平均は2.89と「どちらともいえない」に近い。また、「この講義を聞いてもっと社会学を勉強したいと思った」かどうかという項目の評価の平均は2.72であり、「どちらともいえない」という評価にかなり近い。つまり、私の授業を受講したことは、社会学をもっと勉強しようとする意欲の喚起には役立っていなかった。私の授業が全学部の学生を対象にした一般科目であったから、これはやむをえないだろう。それから、「書評レポートの課題は多すぎた」かどうかという項目の評価の平均は3.19であり、「どちらともいえない」という評価にかなり近い。

質問5で授業に対する感想、批判、注文などを自由に書いてもらったが、この質問への回答によっても、授業改善がどのくらいうまくいったかを見ておく。この質問への回答には、社会学の授業の中で映画を上映することを評価するものが多かった。また、書評レポートの課題を課したことは、レポートの書き方の練習となったという回答があった。逆に、映画を上映することへの不満はまったくなかった。こうしたことから、授業改善がかなりうまくいっていたと判断できる。

さて、質問2で私の授業を学生に100点満点で採点してもらったところ、72.9点であった。学生が授業改善を好意的に見ており、授業のやり方や講義内容にあまり問題はなかったから、学生は72.9点とまああの得点を私の授業に与えたのであろう。

第2に、授業の悪い点を指摘してもらい(質問3)、授業の改善方法を提案してもらったが(質問4)、これらの質問の回答を考察したい。同じような回答がこれら2つの質問には挙げられていたので、両者を一緒に考察する。

かなり多くの学生は、映画を上映したとき、授業が90分で終わらないことに不満をもらしていた。私は、学生が授業時間の延長に不満を抱かないように策を講じたし、さまざまな考えをめぐらした。例えば、第1回授業において、映画を上映するときは90分で終わらないので、それでよいという学生だけが受講するようにと指示をした。だから、学生は授業時間が延長となることを了解して、受講したはずである。にもかかわらず、不満が強かった。確かに、

映画を2回に分けて上映すれば授業時間内に終わらせることができたけれど、映画の感動が失われてしまうから、あえてそうはしなかった。授業を開講する曜日と時限を決めるとき、事務担当者に4限と5限のように2時限連続の授業をおこなえないか尋ねたが、それはできないと言われた。そこで、やむをえず、1日の最後である5限に開講し、映画を上映するときは授業時間の延長をおこなったのである。授業の特徴に応じて、開講時間をより柔軟に設定できれば、学生の不満をかなり和らげることができたであろう。

次に、2人の学生が、教室がかなり明るいので、映画やドキュメンタリーが見にくいということを挙げていた。教室には、ビデオをプロジェクターでスクリーンに拡大する装置があった。拡大をするので、暗幕を完全に引いて、教室を真っ暗にしないと、スクリーン上の映像が見にくかった。だが、教室が蒸し暑くなってしまうので、暗幕を完全に引いて真っ暗にしてしまうことが6月にはできなくなってしまった。また、見にくいので、ビデオをテレビに映し出す装置のある教室に変更するかどうか学生に尋ねたが、教室を変更しないほうがいいという学生が多く、教室変更をおこなわなかった。これらの理由から、スクリーン上の映像が見にくいという苦情が寄せられた。私は見にくいことに気づいていたが、そうした事情からどうしようもなかった。

それから、私が講義で自分の意見を押しつけているという印象をもった学生がいた。私は学生と意見や視点が違っていても、それでかまわないと言っている。また、テストにおいて学生の意見が私のそれと違うときどのように書いたらいいかと尋ねた学生がいた。これに対しては、私が講義したことを書いた上で、学生は自分の見解を書いてほしいし、そのことをむしろ期待していると講義中に話し、そのことをプリントにして配布した。だから、私は自分の見解を学生に押しつけたことは一切ない。むしろ、私は学生と対話することが重要と考え、第1回授業でアポイントを取った上で質問などに研究室に来るように指示をした。しかし、アポイントを取って私の研究室を訪ねた学生は、1人もいなかった。ただし、授業が終了した後に、数人の学生は私に質問をしたり、私の意見を求めたりした。

書評レポートの課題図書が入手しにくいということも挙げられていた。しかし、私は、入手が容易な文庫や新書を中心に課題図書を選んだ。むしろ、学生が図書館の利用方法や書店への本の注文方法を知らないということが問題である。図書館のオリエンテーションに参加するようにといったことは、学生

が入学したときに各学部で指導すべきである。こうした指導がなされていれば、この苦情はなかったと思われる。ところで、課題図書を事前に書店に注文しておくことも考えたが、一般科目の「社会学」の授業を担当するのが初めてであったので、受講学生数の予想を立てることがまったくできなかった。たとえ予想できたとしても、第1回授業に約300人の学生が押し寄せ、受講学生が最後に30数人になってしまうのでは、図書の注文のしようがない。

私の授業のシラバスが文学部の学生には渡っていないという指摘があった。事務担当者から授業のシラバスを書くように言われ、私はかなりの時間を費やして書いた。にもかかわらず、受講希望学生にそれが配布されていないとすれば、何のための努力だったのだろうかと思う。シラバスを全学部の学生に配布するとか、インターネットで誰でも簡単に閲覧できるようにすべきだ。

社会学の参考文献を挙げるようにという注文があった。「講義ノート」の最後に講義に関連の深い参考文献表をつけておいたので、興味のあるテーマの関連文献はすぐ見つけられるはずである。だから、この注文は的外れだと思う。

さて、前述のように、質問1に対する回答によれば、授業のやり方や講義内容でとりたてて問題点はなかった。質問3から質問5までに対する回答においても、学生は授業のやり方（例えば、話し方や板書の仕方）や講義内容に苦情をまったく言っていないから、そうした点で問題はなかったようだ。

以上を要約すると、次のようになる。学生が指摘するように、私の授業にはいくつかの不備があったかもしれない。しかし、私は授業中にそのいくつかを改善しようと努力した。また、不備の多くは私の力ではいかんともしがたいものであった。

第3に、社会学の講義をしただけでなく、書評や論文の執筆の仕方を教えたことについて述べたい。私は大学院生の修士論文の審査を何回かおこなったことがある。そこで気づいたのは、修士論文が学術論文の形式になっていないものが多いということである¹⁰。例えば、論文では、まず初めに論文で何を解明するかといった論文の目的を提示し、次に本論でその解明をおこない、最後に判明した結論を明示するはずである。ところが、論文の目的を提示せず、また、本人もそれを意識せず、頭に浮かんだことをただ漫然と作文するといった修士論文にしばしば出会った。こうしたことが起こるのは、大学の学部時代に論文の執筆方法を教わらず、大学院に進学したためであろう。そこで、私は、学部の学生に研究の方法を組織的に教える必要性を痛感し、一般科目の

「社会学」の授業で書評や論文の執筆の仕方を教えることにしたのである。

私個人のことを振り返ると、研究の方法を日本の大学で教えてもらわなかった。大学院に進学し、論文を書くようになって、私は論文を執筆する方法に関する本を読んで自習した。また、オーストラリアの大学に留学し、研究のために図書館を利用することの重要性に気づき、司書に図書館利用法を教えてもらった。日本の大学では、学生は研究の方法を自分で勉強すべきであり、そうしたことをしないのは学生が悪いといった雰囲気がある。つまり、学生自身がその必要性を鋭く洞察し、見よう見まねで習得すべきだと考えられている。しかし、研究の方法を学生に教えないのは大学教官の単なる怠慢にすぎないと、私は思う。

私見によれば、研究の方法として学生に教えておくべき基本は、ブラインドタッチによるアルファベットのタイプ、パソコンの使用法、書評や論文の執筆の仕方、図書館の利用法である。これらのことを一般教育課程で、懇切丁寧にかつ組織的に、学生に教えておくべきだ。その習得によって、学生はその後の研究を大いに進展させることができるだろう⁴⁾。

さて、大学院の開設や定員の増加が最近おこなわれている。これによって、より多くの人が大学院で研究できるようになった。これ自体はよいことかもしれない。ただ、もし研究の方法を学生に教えることがないがしろにされるならば、研究をまともにできない大学院生が、将来、大量に生まれてくることが予想される。私はこうした事態の発生を危惧している。

第4に、私はこれまで授業改善のいろいろな方法を試してみたが、そうした試行錯誤について述べたい。

授業改善の1つの例として、三重大学の織田揮準氏(織田 1997)が提唱する、学生からのフィールドバック情報を取り入れた授業がある。同氏の提唱する授業改善は、次のようなものである。「大福帳」と呼ばれる連絡帳を学生に渡し、毎回の授業ごとに授業への疑問、感想、要望などを自由に書いてもらい、教官はそれに対して赤字でコメントを書く。そして、教官は学生からの要望などによって授業を改善する。私は、平成9年度の後期の授業(社会学C)でこの授業改善を実施した。しかし、これはあまり効率的でないことが判明した。多くの学生は「△△で私を見かけた」とかいった個人的なことを大福帳に書き、授業への疑問や要望をあまり書かなかった。だから、大福帳を読んでも、授業改善の

手がかりはあまり得ることができなかった。半年間、この方法を実施して学生から得られた唯一の有益な助言は、板書をもっと整理して書いたほうがよいということであった。毎回3時間ほどを費やしてコメントを書く割には、授業改善の有益な手がかりを得ることができなかった。また、アンケート調査によれば、大福帳を導入したからといって、学生が授業をより熱心に聴講するようになったということにはなかった。そこで、それ以来、この授業改善は実施していない。

さて、大学での授業改善についての本が最近いくつか出版されている。そこで、私はこれらにも目を通した。例えば、森田保男氏と大槻博氏による『実践的大学教授法——どうすれば、真の教育ができるのか——』はそうした本の1つである(森田・大槻 1995)。著者たちはこの本の中で、アンケート調査をおこない学生の声を聞き、それを授業に生かすとか、むやみに休講にしないとかいったことを提案している。私はこれらの提案はその通りだと思う。ただ、私はそうした授業改善のほとんどを既に実践しており、著者たちの提案で目新しいものはなかった⁴⁾。

とはいっても、自分の授業に反省すべきことがないわけではない。私は学生に私が講義したことにとづいて自分で考えることが大切だと言いながら、授業で社会学の知識を解説することに力点を置きすぎていた。ある学生は質問4への回答で討論を授業に導入することを提案したが、討論などを授業に導入し、学生に自ら考えさせることを促す工夫をすべきであったと、私は思う。荻谷剛彦氏は学生に考えさせる授業をおこなうためにさまざまな工夫をしているが(荻谷 1996; 荻谷 1997)、こうした工夫を参考にしながら、学生に考えさせる授業を作ってゆきたい。

第5に、岡山大学の教育学部における授業改善の方法を提案したい。それは、教官が自由に他の教官の授業を参観できるようにすることである。他の教官の授業を参観し、自分の授業を改善する手がかりを得ることができる。逆に、自分の授業を他の教官に参観してもらい、批評をもらうことで、授業のやり方を改善できる⁵⁾。このように教官が相互に授業を批評しあい、絶えず授業を改善してゆく姿勢が重要だと、私は思う。この授業改善は、既に京都大学で実践されている(京都大学高等教育教授システム開発センター 1997)。岡山大学教育学部でもその授業改善を導入して、教育の質を向上させてほしい。ただし、1つの学部には所属する大学教官の間には、相互に相手のことに干渉すべきではないという

不文律があるから、この制度の導入は困難かもしれないが。

第6に、教官の授業負担について述べたい。私は平成10年度、半年の一般科目「社会学」、学部の授業としては、半年の講義である「社会学A」と「社会調査」、通年の「社会学演習」、修士課程の通年の講義である「社会学特論」を担当している。さらに、修士課程で通年の「社会学特論演習」、博士課程で2コマの授業もおこなうことになっていたが、受講学生はいなかった。この授業負担は重いかどうかを検討したい。

比較のために、オーストラリア国立大学人文学部社会学科における、教官の授業負担を紹介したい。1人の教官は週に1つの講義と3つのチュートリアル（演習に相当する）を担当している。講義の受講学生を少人数に分けて、チュートリアルをおこなうから、チュートリアルは同じことの繰り返しである。だから、教官は週に1つの講義と1つのチュートリアルを準備するだけでよい⁶⁾。これと比べると、私の授業負担は重いように思われる。

よく日本の大学の教官はうす茶けた昔のノートを改訂することなく毎年同じように読み上げて講義をしていると言われる⁷⁾。しかし、週に5コマも異なった講義や演習を準備するのは並たいていの努力ではできないことである。いきおい、多くの教官は昔の講義ノートを10年1日のごとく読み上げて講義をすませてしまうことになるのではないだろうか。授業の準備を十分にせず、学生を引きつけるような授業をおこなうためには、授業負担をもっと軽減しなければならないだろう。ちなみに、私は授業の準備のために、研究にほとんど時間をさけなかった。

岡山大学教育学部では、授業負担が最近増加していることも付け加えておかねばならない。兵庫教育大学連合大学院博士課程に参加し、博士課程の授業も開講しなくてはならなくなった。さらに、教養部が廃止され、一般科目も担当することになった。こうして担当する授業のコマ数が増え、担当する授業の種類が増加してゆく。幸いなことに、私は平成10年度は、修士課程の「社会学特論演習」や博士課程の授業を開講しなくてよかったが、もし開講することになっていけば、週に異なった授業を8コマも担当することになる。このように多くの授業を担当して、十分に準備し、学生を満足させるような授業ははたしてできるのであろうかと、私は思う。

6 結 論

私は平成10年度の前期に一般科目の「社会学」の授業を担当した。本稿では、受講学生の授業評価な

どにより、その授業を検討した。判明した点は、次の3点である。

- (1) 私は、映画やドキュメンタリーを上映したり「講義ノート」を配布することで、社会学の授業を理解しやすくするように努めた。また、書評レポートを学生に書かせ論文作成の基礎を学ばせようとした。学生の授業評価によれば、こうした授業改善はかなり成功をおさめていた。それから、授業のやり方や講義内容でとりたてて問題点はなかった。そのため、学生は100点満点で72.9点とまあまあの得点を私の授業に与えた。
- (2) 映画を上映したとき、授業時間が延長になるといった苦情が多かった。これ以外にも、例えば、スクリーンの上の映像が見にくいといったような苦情が挙げられた。私はそうした苦情を解決しようと授業中に努めたが、その大部分は私の努力ではどうにもできないものであった。
- (3) 大学の当局や事務担当者には、次の2つが望まれる。第1に、2時限連続の授業を設けることができるようにするなど、授業の性格に応じてより柔軟に、授業を開講できるようすべきだ。もしこれが可能であれば、私の授業に対する学生の苦情はほとんどなかった。第2に、シラバスを全学部の学生に配布するとか、インターネットで誰でも簡単に閲覧できるようにすべきだ。

次に、授業の改善として、私は次の3点を提案した。

- (1) ブラインドタッチによるアルファベットのタイプ、パソコンの使用法、書評や論文の執筆の仕方、図書館の利用法といった研究の方法を、一般教育課程で学生に組織的に教えておくべきだ。
- (2) 大学の授業を他の教官に公開すべきだ。他の教官の授業を参観し、自分の授業に生かせるし、逆に、自分の授業を他の教官に参観してもらい、助言を仰ぐことで、自分の授業を改善できる。
- (3) 教官の授業負担を軽減し、授業の充実をはかるべきだ。

(注)

- (1) 映画にもとづいて社会学を講義するという授業方法は、私が考え出したものではない。中山(1993)は、この方法による社会学の教科書を既に出版している。
- (2) 浅野氏(浅野 1994, pp.82-83)は卒業論文が書けない大学4年生がいるから、論文の書き方を指導することが必要であると主張している。
- (3) 私は、岡山大学教育学部の学部と大学院修士課

程で内容よりも研究方法を徹底的に教えてきた。その修士課程は研究者養成のために設置されているわけではないけれど、私が指導教官をつとめたある学生は修士論文の一部をレベルの高い、レフリー制の学術雑誌に発表できた（野上 1997）。このことから、研究方法を指導することの重要性が分かるであろう。

- (4) 森田氏と大槻氏による著書は、分かりやすく実践的である。また、私は彼らの主張に賛同するところが多かった。これ以外にも、授業改善の方法を解説している本はいくつかあった。『授業をどうする！』では、カリフォルニア大学バークレー校の教官がおこなっている授業改善の試みが紹介されている（Davis *et al.* 1983）。また、浅野氏は『大学の授業を変える16章』で自ら実施している授業改善の方法を論じている（浅野 1994）。
- (5) オーストラリア国立大学では、Study Skills Unitという部署があり、その職員はその大学の教官に効果的な授業のやり方を教えていた。例えば、わかりやすい授業にするための話し方のコツや視聴覚器材の使い方を教えていた。また、教官も他の教官の授業を参観し、自分の授業に生かしていた。
- (6) 私が学んだオーストラリア国立大学では、学部の授業は講義とチュートリアルが1組となっている。学生は1週間のうちに1つの講義とそれに関連するチュートリアルを1つ受講するのである。チュートリアルは15人くらいの学生を対象におこなう。だから、45人の受講学生があると、講義は45人を対象におこなうが、チュートリアルは受講学生を15人ずつの3クラスに分けておこなう。1人の教官は1週間のうちに1つの講義と3つのチュートリアルを担当することになっていた。受講学生が多く、4つ以上のチュートリアルのクラスを設ける場合には、大学院生をチューターとして雇用し、チュートリアルを担当させていた。
- (7) 日垣隆氏の『〈検証〉大学の冒険』（日垣 1994）には、こうした大学教官の例がたくさん

紹介されている。

（引用文献）

- 浅野 誠. 1994. 『大学の授業を変える16章』 大月書店.
- Davis, B. G., L. Wood, and R. Wilson. 1983. *ABC's of Teaching with Excellence*. Teaching Services, University of California. (香取草之助監訳. 『授業をどうする！ カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイディア集』 1995. 東海大学出版会)
- 日垣 隆. 1994. 『〈検証〉大学の冒険』 岩波書店.
- 荻谷剛彦. 1996. 『知的複眼思考法』 講談社.
- 荻谷剛彦. 1997. 「学生に考えさせる授業の工夫——授業のレリバンスと導入の工夫」『メディア教育開発センター平成9年度研修コース 大学授業の自己改善法 あなたの授業を自分で見直しませんか！ 授業の自己評価法・改善法を探る 合同説明会・資料』1-2頁 メディア教育開発センター.
- 京都大学高等教育教授システム開発センター (編). 1997. 『開かれた大学授業をめざして——京都大学公開実験授業の一年間——』 玉川大学出版部.
- 森田保男・大槻 博. 1995. 『実践的大学教授法——どうすれば、真の教育ができるのか——』 PHP 研究所.
- 中山速人 (編). 1993. 『ビデオで社会学しませんか』 有斐閣.
- 野上 真. 1997. 「大学生運動部主将のリーダーシップ効果を規定する諸要因」『実験社会心理学研究』第37巻第2号 203-215頁.
- 織田揮準. 1997. 「学生からのフィードバック情報を取り入れた授業実践」『メディア教育開発センター平成9年度研修コース 大学授業の自己改善法 あなたの授業を自分で見直しませんか！ 授業の自己評価法・改善法を探る 合同説明会・資料』4-7頁 メディア教育開発センター.

付録1 一般科目「社会学」のシラバス

付録1 一般科目「社会学」のシラバス

授業科目の区分		教養科目			
講義番号	5608	授業科目 欧 文	社会学 Sociology	単位数 2 単位	
曜日、時限	火曜、5時限	対象学生	1年次以上の学生		学期 前期
担当教官	野邊 政雄	所 属	教育学部 助教授 (内線 7625)		
授業の目標 並びに概要		映画は、現実の社会のある側面をデフォルメしたものです。映画の作品を手がかりとして、社会学のいくつかの問題をわかりやすく話してゆきます。			
授 業 計 画 画	1	チャップリンの「モダン・タイムス」を見る			
	2	分業化についての講義			
	3	黒沢明の「生きる」を見る			
	4	官僚制についての講義			
	5	大島渚の「儀式」を見る			
	6	家制度についての講義			
	7	小津安二郎の「生まれてはみたけれど」を見る			
	8	子供の社会化についての講義			
	9	浦山桐郎の「キューポラのある町」を見る			
	10	職業についての講義			
	11	「公害原論」を見る			
	12	住民運動についての講義			
	13	小津安二郎の「東京物語」を見る			
	14	高齢化についての講義			
	15	テスト			
アドバイス		社会学の初心者を対象とする講義です。社会学の講義を通して、大学での研究方法についての話もします。映画論の講義ではありません。映画のビデオを入手できないときは、映画を変更することがあります。			
テキスト 教材 参考書等		毎回、プリントや資料を配布します。			
成績評価 の方法		2回の書評ないし調査レポートと最後のテストによって評価します。			
コメント		単位を取得するためには、いかなる理由であれ、 <u>3分の2以上の出席</u> が必要です。つまり、クラブ活動や教育実習で授業に出席しないときは、欠席扱いとなります。楽勝科目ではありません。			

付録2 第2回授業で配布した「講義ノート」

付録2 第2回授業で配布した「講義ノート」

「モダン・タイムス」は分業を描いていた。

アダム・スミス(1723-1790)は『諸国民の富(国富論)』(1776)の中で「分業」について次のようにいっている。(第1編、第1章 分業について)

分業がおこなわれていないときは、1人の職人は1日に1本のピンも作れなかった。

しかし、当時の工場では、ピンを作る作業が18の工程に分けられていた。

つまり、

針金を引き延ばす

針金をまっすぐにする

針金を切る

針金をとがらせる

など

分業によって、熟練した職人が必要ではなくなった。

分業のおこなわれている工場では、10人が1日で48,000本以上のピンを作っていた。つまり、1人が4,800本である。

その結果、分業をおこなうことによって、製品を大量に作れ、そのことで製品が非常に安価になった。

分業には、2種類ある。

「工場内分業」と「社会的分業」

「工場内分業」 経営体内部での分業。

「社会的分業」 社会の中での分業。

両方の分業が進展することで、大量生産が可能となる。

1913年に、アメリカのフォードは、分業を徹底的に押し進め、車体を動かすという組立方法で黒色のモデルTという自動車を1種類だけ製造し始めた。労働者はそれぞれの持ち場で部品を取りつけた。

1台の組立時間 12時間 → 2時間以下

自動車が安価になり、一部の裕福な者の持ち物から、大衆の所有できるモノとなった。アメリカにおける1920年代における自動車の爆発的な普及。

「大衆消費社会」の到来。

しかし、この仕事の仕方は、労働者を精神的にも肉体的にも消耗させた。

また、人間を組織の中の歯車にしまった。

現代社会における正の（ポジティブ、望ましい）側面

大衆消費社会とは、大量生産と大量消費のメカニズムが大衆消費によって支えられる社会をいう。

1920年代に、アメリカは大衆消費社会に到達した。

社会に大量のモノがあふれ、一般の人々がそれを入手できる、豊かな社会となった。

「産業社会論」

社会が機械技術によって編成されている。

大量生産、大量消費、マス・コミュニケーションの発達、交通・通信・情報システムの発達。豊かな社会の到来。

（例）

ロストウ Rostow, Walt Whitman (1916-)

『経済成長の諸段階』（1960）

経済成長段階説を唱える。

伝統的社会 → 離陸のための先行条件 → 離陸

→ 成熟への前進 → 高度大衆消費社会

現代社会における負の（ネガティブ、望ましくない）側面

人間が組織の中の歯車となって、労働の主体とはなれない。

人間をかたわにし、そこに縛られる部分的な人間となってしまう。

疎外感

仕事から生き甲斐をえることができない。

無力性、無意味性

「官僚制」

非人格的な規則に従って、組織の中で働くようになる。

「管理社会論」

国家のような中枢管理機関が個人の生活を監視し、管理する。

オーウェルの小説『1984年』

環境問題の発生

大量生産・大量消費の社会では、大量のゴミや汚染物質が生まれる。

（例）水俣病、豊島の不法ゴミ廃棄。

使い捨ての問題。新品の方が修理するよりも安い。

社会的分業の発展

→ 消費者は生産者の顔を見れない。大量に農薬を使用。

公害の加害者は被害者を知らないことがある。

被害者の苦しさに無関心。

（参考文献）

常松 洋 『大衆消費社会の登場』（世界史リブレット48） 山川出版社 1997年

大衆消費社会が初めて登場した1920年代のアメリカを概説している。

中岡 哲朗 『工場の哲学——組織と人間——』 平凡社 1971年

さまざまな労働現場を取材し、労働が分業化し、労働の生き甲斐を奪っていることを説く。

付録3 学生に配布した論文作成に役立つ文献のリスト

付録3 学生に配布した論文作成に役立つ文献のリスト

論文を書くための参考文献

- 1 小林康夫・船曳建夫（編）、『知の技法』、東京大学出版会、1994年。
最近、この本の改訂版がでたが、そちらではない。以前の版のもの。
この本の第3部は、論文の書き方全般を扱っている。また、230頁の参考文献は役に立つ。
- 2 澤田昭夫、『論文の書き方』（講談社学術文庫）、講談社、1977年。
本の目的は、1と同じ。卒論を書くための全般的な方法を解説している。
- 3 木下是雄、『理科系の作文技術』（中公新書）、中央公論社、1981年。
- 4 木下是雄、『レポートの組み立て方』、筑摩書房、1990年。
3と4の2冊はレトリックの技法で、いかに相手にわかりやすい文章を書くかを解説している。
- 5 フライ（著）、酒井一夫（訳）、『アメリカ式論文の書き方』、東京書籍、1994年。
論文の書き方を実践的に解説している。

（平成10年7月10日受理）